



(公財) 山階鳥類研究所
〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
電話：04-7182-1101 FAX：04-7182-1106
<http://www.yamashina.or.jp>



アホウドリ新繁殖地形成事業による聳島での人工飼育個体の繁殖について

<東京都 同時発表>

平成30年5月29日(火)
(公財)山階鳥類研究所

むこじま
小笠原群島聳島におけるアホウドリの新繁殖地形成事業※において、一昨年・昨年に引き続き、2008年に聳島を巣立った人工飼育個体1羽と、野生個体の番いの中で産卵・孵化に成功し、雛が確認され、5月6日から5月16日の間に巣立ったことが、東京都小笠原支庁の委託調査で分かりました。聳島での雛誕生が確認されたのは3例目です。また、卵は孵化しませんでした。聳島では新たな番いの産卵も今年2月に確認されました。

※この事業は、(公財)山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て、新しい繁殖地を形成する目的で、伊豆諸島鳥島のアホウドリの雛を小笠原群島聳島に移送(2008～2012年)し、その後モニタリングを実施しているものです。

1. 繁殖に成功した番い

2008(平成20)年に人工飼育し、巣立った個体(カラーリング番号 赤Y01、10歳、雄)と野生個体(足環なし、雌)

2. 新たに産卵した番い

雌は2009(平成21)年に人工飼育し、巣立った個体(カラーリング番号 赤色Y11、9歳)ですが、雄は個体特定できませんでした。なお、Y11は2013-14年と2014-15年に媒島で繁殖した個体であり、今シーズンは繁殖場所を変えたこととなります。

3. 繁殖を確認した場所

両番いとも聳島北西部の雛飼育地。Y01はこの場所で、2012年から6シーズン連続して足環なし個体との間で産卵が確認されており、一昨年から繁殖に成功するようになりました。



4. 確認の状況

2018年2月15日から22日の調査において、これまで繁殖していたY01の番いの雛（カラーリング 赤色 Y77 を装着）と、そのすぐ横で抱卵するY11が確認されました。Y11の卵については、通常の孵化時期より1ヶ月以上遅れていたため、卵を確認したところ、すでに腐敗しており、未受精あるいは初期死亡だった可能性が示唆されました。

その後、東京都小笠原支庁の職員が2018年5月6日に現地を訪れた際、巣立ち間際のアホウドリの雛が確認されましたが、同年5月16日に山階鳥類研究所の研究員が現地を訪れた際には、この雛の姿はなく、すでに巣立った後だったことが確認されました。



写真1. 今年生まれたアホウドリの雛と給餌する雌親(中央)、および今年新たに繁殖したアホウドリ(Y11)



写真2. 今年新たに鴛島で繁殖したアホウドリ Y11(中央下側、巣内に小さく卵が見える)



写真3. 今年生まれたアホウドリの雛の巣立ち間際の姿

* 写真1、2の撮影は山階鳥類研究所（小笠原群島聳島 2018年2月）、写真3の撮影は東京都小笠原支庁（小笠原群島聳島 2018年5月）

聳島およびその近くの島におけるこれまでのアホウドリの繁殖状況

	聳島	媒島(聳島から 7km 南)	嫁島(聳島から 22km 南)
2012-13年	1卵(孵化せず)		
2013-14年	1卵(孵化せず)	1雛誕生	
2014-15年	1卵(孵化せず)	1卵(孵化せず)	
2015-16年	1雛誕生		1雛誕生
2016-17年	1雛誕生		
2017-18年	1雛誕生+1卵(孵化せず)		

*アホウドリは11月に産卵し、雛は翌年1月に孵化して、5月巣立つため、繁殖は年をまたぐ

この件についての問い合わせ先

事業責任者（写真の問い合わせ先）：（公財）山階鳥類研究所 保全研究室長 出口智広
 電話：04-7182-1107、Fax：04-7182-4342、メール：deguchi@yamashina.or.jp

広報担当者：（公財）山階鳥類研究所 広報コミュニケーションディレクター 平岡考
 電話：04-7182-1101、Fax：04-7182-1106、メール：hiraoka@yamashina.or.jp

<参考>

アホウドリ (*Phoebastria albatrus*)

ミズナギドリ目アホウドリ科

特別天然記念物

国内希少野生動植物種 (種の保存法、1993年指定)

絶滅危惧II類 (環境省レッドリスト 2012)

分布及び個体数

- ・ 繁殖地は、日本の伊豆諸島鳥島と尖閣諸島
- ・ 非繁殖期には、北太平洋のベーリング海やアリューシャン列島、アラスカ沿岸まで移動する。
- ・ 1949年の調査で一度絶滅したと考えられたが、1951年に約10羽が鳥島で再発見された。1971年には尖閣諸島で少数の生息が再発見された。
- ・ 減少原因は、1890～1900年代に羽毛採取のために大量に捕獲されたことによる。
- ・ 保全上の成果などもあり、現在個体数は約5,000羽 (尖閣個体群は除く) まで回復したと推定されている。

形態及び生態

- ・ 成鳥は全長が84～94cm。
- ・ 成鳥は全体に白く、風切羽や尾羽が黒い。頭部は淡黄色。ヒナから2歳ごろまでの若鳥は全身黒褐色で、成鳥羽になるまでは7～8年かかる。
- ・ 繁殖期は10月～翌年5月。
- ・ 巣立ち後3～4年で巣立った場所に帰ってくる。5歳前後から繁殖に参加するが、巣立った場所で繁殖を行う傾向が強い。

アホウドリの小笠原再導入

現在、アホウドリのふたつの繁殖地のうち、伊豆諸島鳥島は活火山であり、万一噴火があった場合には、アホウドリの個体群に大きな影響が出る可能性がある。もうひとつの繁殖地である尖閣諸島は、繁殖状況の調査や保護活動を行うのが難しい現状である。このため、過去にアホウドリが繁殖していたことが知られている場所から、1カ所を選んで、アホウドリの営巣地を復活させることで、本種の復活を一層確実にすることが望ましいと考えられた。このために山階鳥研では、生まれた場所に戻って繁殖する同種の習性を利用して、ヒナの移送により小笠原群島聳島にアホウドリの繁殖地を作ることとした。2008年から2012年の5年間に合計70羽のアホウドリのヒナを鳥島から聳島に移送して人工飼育し、69羽を巣立たせた。聳島の飼育地には2009年から野生のアホウドリの飛来が観察されるようになり、2011年からは人工飼育した個体の帰還が認められた。2012年11月14日には、2008年に巣立ちした人工飼育個体 (カラーリング番号Y01、雄) と野生個体 (足環なし、雌) の間に初めて産卵が確認された。

なお2014年5月に、聳島から約5キロ南の媒島 (なこうどじま) において、人工飼育個体 (2009年巣立ち、カラーリング番号Y11、雌) と鳥島で生まれた年齢不詳の雄との間で1羽の雛が誕生したことが確認されている。また2016年5月には聳島から約22キロ南の嫁島 (よめじま) で雛1羽が確認されている。この雛の親鳥は不明だが、山階鳥研がこの事業で人工飼育して巣立たせた個体、あるいは同事業で誘引された個体と推察されている。

この事業は、(公財) 山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て実施している。

(以上)